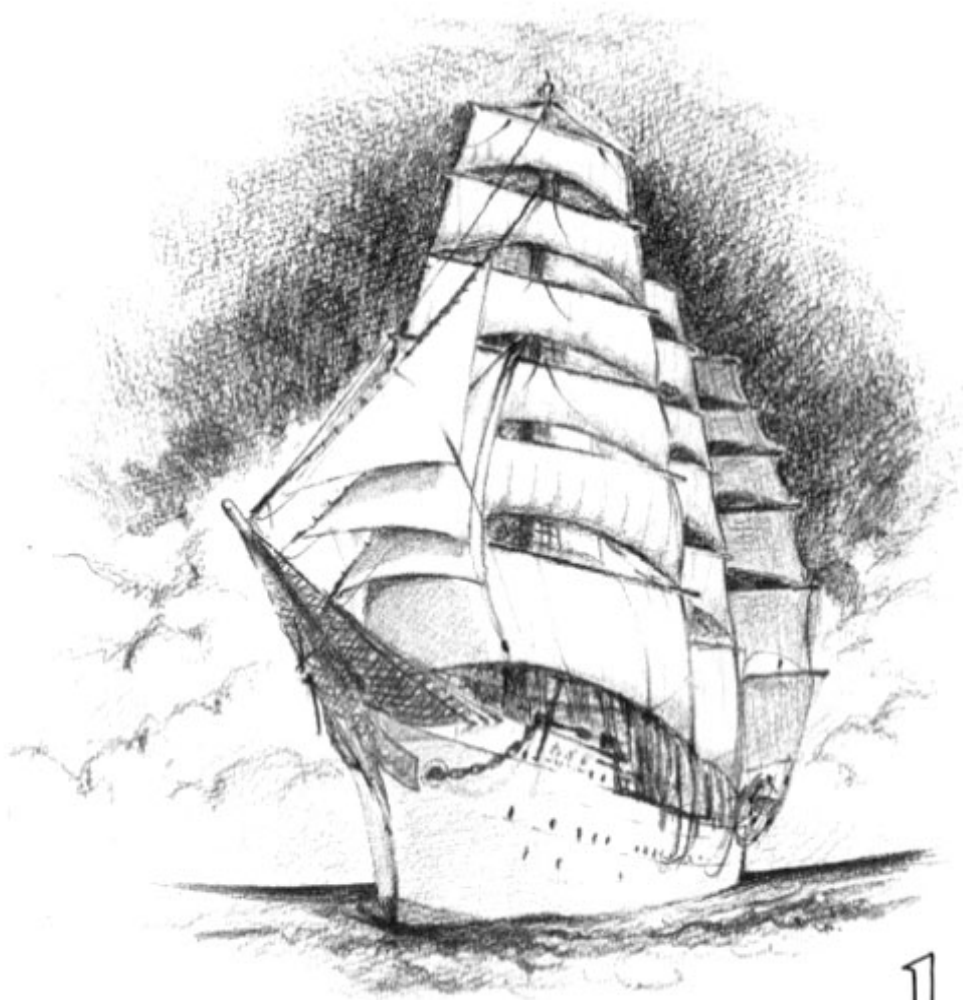


平成28年1月5日発行(毎月5日1回発行)  
第56巻1月号(通巻678号)

# 風土



1

初 日 神 蔵 器

稲は穂に白洲次郎の声とんで

栗拾ふ波郷友二の家族来て

烏瓜大竹藪の門をなす

名をかへて大宮さくら冬ざくら

茶の花の鈴咲き鳴つて西鶴忌

綿虫や拈華微笑の城太郎

去年今年仏師に賜ふ千支の申

初日より遠いあなたにこゑとどく

金銀のさざ波うまる初茜

二日はや夢にもかをる「高野切」

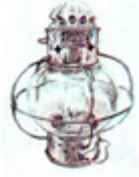
初東風や妙正寺川神田川

寒雷や四畳半にて恋に落つ



# 竹間集

同人作品



松手入れ

中村洋子

松手入れ表門より始まれり  
別格の南禅寺なる松手入  
木の実落つ音をつなぎてまた一つ  
一舟の出てゆく釣瓶落しかな  
木道のつなぎ目弾む草紅葉  
蔦紅葉古刹に隣る珈琲館  
小鳥来る絞りの布の糸ほどく

水の秋

橋添やよひ

層塔を鯉の横切る水の秋  
等伯の父子の襖絵秋気澄む  
かりがねや法華経六卷寺宝とし  
色鳥やただ今「結縁灌頂」中  
ずいき祭り芋茎四百五十本  
かたまつてまんじゆしやげはた学侶墓地  
生涯を肩書き持たず水落とす

呉須の色

浅田 光代

馬場駆くる馬の血管秋高し  
秋の子子るの字るの字に影を曳き  
先生に木の実集まる日和かな  
忘らるる色に立ちたる藤袴  
衰へぬ落暉に障子貼りにけり  
蹴轆轤のにぶくひびけり十三夜  
ゆく秋の珈琲碗の呉須の色

雲 梯

柿沼 盟子

天地の距離を広げて彼岸花  
浅間から小諸に抜けて走り蕎麦  
まとまらぬ窓の水滴秋徼雨  
雲梯を露ごと掴み渡りけり  
単線のポイントかはり石叩  
ペランダに月影著き十三夜  
鎧戸の守る絵硝子草の絮

赤のまま

高村 令子

姿よき風を選びて萩の花  
戦知る女の強し草の花  
鳶の輪の大きく秋をこぼしけり  
遙かなるものを見続け破案山子  
息に出る脚の衰へ赤のまま  
破案山子忘れ上手となりにつ  
林檎剥く悼む言葉を探りつつ

まどろみに

土井 三乙

かりがねや手帳にうつす時刻表  
鳥渡る遠き山ほど空に近く  
まどろみに小鳥の声の入り来たる  
穴惑誰にも好かれず疎まれて  
秋の灯となりて子規読むことの遅々  
冬仕度日の差して手を休めをり  
月明にことば短かく別れけり

くるりくるり

根岸 善行

眼薬差すくるりくるりと蜻蛉の眼  
赤蜻蛉 曲輪 門 跡 櫓 跡  
秋夕焼小焼の丘に星一つ  
雨一つ二つ三粒や松手入  
大綿や帰りは怖いわらべうた  
植木売りべつたら漬売り隣り合ふ  
快晴の大雪山やななかまど

古都回遊

門伝史会

洛北や鷹峰三山紅葉映ゆ

秋日濃し光悦垣の苔浮かす

奥まりて光悦翁墓所木の実落つ

源光庵 四句

「悟りの窓」白さざんかに日の当たる

足ることを知るも悟りか水澄めり

来し方の迷ひにふれず帰り花

血天井の真下に佇ちて秋惜しむ

西教寺 五句

笹子鳴く山路は寺へ続きをり

光陰を踏みゆく思ひ落葉徑

菩提子落つ寺苑に明智偲びけり

不断念仏根本道場底冷えす

客殿へ弥陀の廻廊冬紅葉

琵琶湖堅田 五句

翁詠みし小春日返す浮御堂

小春風千体阿弥陀笑ましぬる

波光る水面につどふ鴨小鴨

湖中句碑石たたき来て輝かす

堅田大友桜公園

紅葉狩り大友桜にまみえたり

ねねの寺石露の花びら明りかな

寺にゐてインタビュー受く石露日和

逝く秋の鍵善に寄り旅果つる

# 山河集

同人作品



神蔵器選

行く秋や使はぬままめパスポート

落合 絹代

小石川後楽園

東京の真ん中にゐて稲を刈る  
小鳥来る港の見ゆる文学館  
晩秋の好日賜ひ誕生日  
椎の木の下に降り積む木の実かな

騎馬戦の始まる号砲天高し

鈴木 庸子

アンカーに渡るバトンや秋澄めり  
行く秋の森に影絵の美術館  
読み終へて葉のいらぬ夜長かな

与謝村の秋夕焼やげんの墓  
夕暮れの竹垣渡る秋の蝶

安永 圭子

朝寒や朝刊届く日本国  
息白く新聞買ひにパリの朝  
退院の友を喜ぶ秋桜

頭上より加賀の言葉や松手入

遠藤道遙子

東京湾周遊船の良夜かな  
秋夕焼柿の木坂の寮歌祭  
謙信の塩の道ゆく雁渡し  
江ノ電に乗る晩秋の海を見に

平安騎馬隊

馬の名に鞍馬 愛宕や秋うらら  
平安騎馬隊通用口通草爆づ  
砂あびの馬秋天を蹴り上げる  
団栗をいつばい拾ふ馬場の裏  
子らが来て山の秋日をかきまぜる

池田 光子



風土賞作品

## 笹子鳴く



内藤 静

星 迎 多 摩 湧 水 を 祀 り あ り  
空 蟬 の こ の 渾 身 の か ら つ ぽ よ  
水 滴 も 硯 も 簡 素 水 澄 め り  
青 瓢 く び れ め で た く 酒 問 屋  
鳥 渡 る 寺 の 寄 進 に 名 を つ ら ね  
鬼 の 子 を あ や す ほ ど な る 風 が 吹 く  
輪 に な つ て 潜 れ ば 鳩 に ち が ひ な く  
母 の 忌 は 永 久 に 勤 労 感 謝 の 日

---

お点前の後の白湯なり笹子鳴く  
お降りのしばらく小雪まじりかな  
いざなぎの鼻が真赤や里神楽  
山眠る耀歌の跡の碑がひとつ  
春なれや鎌倉宮の鳩真白  
父の字の錠の開け方惚芽吹く  
くれなるのト半椿といふはこれ  
蓄ふる髭と勲章亀の鳴く  
新しき大極殿や麦の秋  
時の日やいつか時計に進み癖  
船渡御について浜町河岸をゆく  
落丁か泰山木の花びらか

新人賞作品

## 魚板



津川かほる

狂言や鳴神落ちて腰を打つ  
湯上りの石鹼の香や夜の秋  
凝らしみる絶筆三句糸瓜垂る  
白萩の白を尽して零れけり  
さざんかのちりていのちをはなやげり  
月冴ゆるベートーベンのピアノ曲  
菓の香仏の香して枇杷咲けり  
とまどひし上り框の寒雀

---

少女来て落椿をば渡されし  
歌舞伎座に木遣りの唄や松の内  
歌舞伎座の地口行灯午祭  
とくとくと苔清水して西行忌  
行く春の魚板を打つや翁堂  
炎抱く狂ほしきひと牡丹の芽  
八方より崖清水して深大寺  
子燕や膳所の商家の深庇  
青葉して本殿のなき三つ鳥居  
青葉ゆくD51黒の力もち  
刃をあてて青柚子の香の身を走る  
喜八詩集・老人の海・曝書

◇特別作品◇

奥の細道 1 / 3

石井 秀一

瑞巖寺

方丈の襖の鷹の眼にも秋

五大堂四方広ごりて夕紅葉

蕉翁もぬかづきたらむ堂の冷え

東北線小駅

みちのくや駅は花野の風の中

道をゆく人脾睨す穂人形

平泉

高館の夢跡に佇ち秋の風

穂人形とはみちのく特有の稲架

照紅葉鞆払ふべし光堂

三代の霊寺日照雨に濃紅葉

狛鼻溪

崖紅葉映る紅葉に浮く紅葉

船頭立石寺の唄に手拍子峡紅葉

黄葉紅葉はらりひらりと岩撫づる

登りては堂登りては巖紅葉

山寺羽黒山・最上川や濁世を隔つ照紅葉

見返りし三五重の塔や初霞

霧かをる五百年杉南谷

最上川庄内平野四十八滝紅葉酒

片時雨脚の短き虹の立ち

白鳥の声に暮れゆく出羽の里

象潟や鳥海映さず松小春

旅装解くいづこで付けし草風

# 風土集



## 神蔵 器選

秋送る縄文土偶の遠まなこ 伊東 吉永すみれ

現世はしがらみ多し烏瓜

秋逝くや昨日と違ふ風に会ふ

銀杏散る赤門前の古本屋

晩年の過ぎゆく早さちちろ鳴く

菊活けて母の匂ひをひきよせる

ワーズワースの詩集にはさむ薄紅葉

武士の倒れ臥すごとど朴落葉

雁渡し魚干す塩の加減かな

手を握るだけの見舞ひや罌雲

山門を入りて紅葉の国となり

新蕎麦や社会見学下見して

新蕎麦を打つふるさとの音の中

秋の田に置く道草のランドセル

暮の秋見習ひシェフの白き帽

川崎 津川かほる

東京 中嶋陽子

晴れてゆく霧の中より警報器 津山 生田 作

刈りたての田に群れほどく鴉どち

陽の中へ竹の秋風透き通る

鋸と鉈庭に持ち出す秋日和

半年を峽より出でずななかまど

『東籬』てふ合同句集菊匂ふ 川崎 遠藤逍遙子

鑑三を説く師の家の良夜かな

茅舎の露朝日に映えて消えにけり

晩秋や空は早や月育て初め

鉦叩経読む母の小さき鉦

名月や今年も命永らへて 東京 広田貞治

公園の大道芸に木の実落つ

庭草を刈りて虫の音遠くなり

名月を映して冥き神田川

天の川難民の子らに夢与ふ

ウイスキー眠らす森や水の秋 川崎 鈴木庸子

農耕車優先道路雁渡し

秋高しフオツサマガナの上歩く

吊橋に間隔制限薄もみぢ

辿り着く精進ヶ滝初紅葉

山嵐急

行く秋や位牌の上の網代笠

芒みみづく軒場に揺るる一草庵

秋うらら坊ちやん列車煙吐く

犬連れの足湯の人や天高し

ずつしりと重きタルトや十三夜

一億の0乗は一そぞろ寒

初めてのキス初めての雪の夜

二兎を追ひ今晚秋の岬かな

落日や一雄の碑置く口力岬

秋の声集めて山の静寂かな

はんなりと赦免地踊り在祭

灯籠頭に八瀬の童子や宵祭

千体文字隠す経蔵くわりんの実

木の実降る仏の中に生かされて

園児等の木の実拾へる大袋

父の真似父にほめられ衣被

佐倉

松崎雨休

東京

奥田茶々

川崎

豎山道助

南丹

南奉栄蓮

相棒は今も植木屋新酒酌む

片肺の胸に爽やか里の風

丑三つの妻も寝返る夜長かな

妻にまた恋をしさうな秋日和

秋夕焼逆さの蛇口残されて

破れ蓮の姿さまざま湖の風

木の実落つ転がる先は風の意に

松茸飯囲む七人家族かな

時雨忌のつどひに渡る小名木川

マイナンバーまた読み返す夜長かな

秋深し我が番号の十二桁

大杉の威風堂々神無月

日のかげら掬ひつつ散る銀杏かな

気がつけば雑用ばかり冬に入る

冠雪の富士を見んとて窓を拭く

転居して眉刷き万年青蕾もつ

鴨川の鴨の尻たて秋の空

麗しき舞子の瞳に秋の水

藤袴紫式部の執筆所

赤城山夕日に染まる蕎麦の花

満月や光を積みて貨車の過ぐ

秋風や刑場跡に六地藏

さいたま

竹生田勝次

秋田

石井美智子

京都

杉本葉王子

川崎

水井千鶴子